

バスケ、バスケ。バスケ!

Hot Winter is Coming!



今年最も注目を集める藤枝明誠の角野亮伍が初めて出場した2012年の決勝(藤枝明誠対沼津中央)

HISTORY OF WINTER CUP

選抜優勝大会の歴史と (ウィンターカップ) 静岡県予選の歩み

中島 洋己=文

(静岡県バスケットボール協会広報委員長・浜松市立高校教諭)

※本文中の敬称略

第

45回全国高等学校バスケットボール選抜優勝大会静岡県予選が、10月25日に県内の高校体育館で開幕する。そして男女の優勝大会が12月23日に東京体育館で開幕する全国選抜大会に出場することができる。このバスケットボールの「選抜大会」は通称「ウィンターカップ」と呼ばれ、サッカーの「選手権大会」、バレーボールの「春高バレー」とともに「冬の高校3大スポーツ」と位置づけられている。今年62回を数える全国高等学校総合体育大会バスケットボール競技(高校総体・インターハイ)よりも歴史は浅いが、3年生が出場できる最後の大会となるこの大会が「高校バスケット最高峰の大会」と言っても過言ではない。特に静岡県の場合、インターハイには男女共2チームの出場枠を持っているが、ウィンターカップは男女1枠、つまり優勝チームのみが東京体育館のコートを踏むことができるという、インターハイ以上に出場すること自体が難しい大会である。指導者、選手たちにとっても、この「ウィンターカップ」という言葉を聞く心が引き締まるような特別な思いがこみ上げてくるはずだ。

まずこのウィンターカップの歴史を簡単に説明したい。昭和46年3月に第1回大会が国立代々木競技場第二体育館で開催された。当時は東北・関東などの各地区で行われる選抜予選を勝ち抜いた16チームのみが全国選抜に出場することができ、静岡県が属する東海地区は男女各1枠しかなく、県予選で優勝しても東海選抜で敗退したらその年の静岡県チームの出場がない場合もあった。昭和50年から出場枠が男女各24

チームとなり、それに伴い東海地区の出場枠も男女3チームとなった。ただ昭和63年12月の第19回大会は東海地区の女子が1枠増となり、誠心(現浜松開誠館)が東海選抜4位で悲願の初出場を決めた。逆に平成元年は東海地区男子が1枠減となり、初出場を目指した沼津学園(現飛龍)が東海選抜3位で涙を呑むドラマもあった。このような地区選抜を経て全国選抜に出場という形はこの平成元年まで続いた。

その間、劇的な変化も起こっていた。それまで年度末に開催され、1、2年生のみの新人戦形式の大会となっていたこの全国選抜大会が、昭和63年3月の大会を最後に年末の12月に移行、冬休みの開催となり同時に3年生も出場できるようになった。インターハイ、国体を戦ってさらに技術を磨いた最上級生のプレーが見られるため、明らかに大会のレベルも上がった。

平成2年からは各地区選抜大会をなくし、出場チーム数を大幅に拡大、47都道府県男女各1チーム+開催地(東京)1チームの合計各48チームとなった。それに合わせ大会の通称名を「ウィンターカップ」とし、以来この呼称が高校バスケットの最高峰の大会名称として定着している。

ウィンターカップが最大の盛り上がりを見せたのは平成10年第29回大会だった。能代工業(秋田)の田臥勇太ブームから観客の入場制限が行われるなど、いわゆる高校バスケットの「人気飽和状態」がピークを迎えた。その後平成21年から男女各48チームに加え、その年の総体全国大会男女優勝・準優勝

チームにも出場権が与えられ、男女各50チームとなり現在に至っている。

開催地と各都道府県の予選についても触れてみたい。開催地に関しては前述の通り、昭和46年から平成5年までは代々木第二体育館をメイン会場に行われた。その間、昭和63年3月開催の第18回大会だけはその年のインターハイのリハーサルも兼ね、神戸で開催された。平成6年は東京体育館、平成7年は代々木第二体育館で行われ、平成8年から東京体育館に定着、平成24年の第43回大会のみ東京体育館の改修工事のため広島県広島グリーンアリーナでの開催となったが、東京体育館は約20年間、インターカッポの聖地として高校バスケット選手たちのあこがれの的であり続けている。

予選の方法に関しては各都道府県の判断に任せられていて、関東地区のように上位4校のみで予選を行う正に「選抜大会」と言える方法や、上位8チームまたは16チームのみで行っている地域、そして現在の静岡県のように地区予選なしで全チーム参加の県大会を行っているところもある。

前置きが長くなったが、ここからは静岡県の選抜優勝大会(ウインターカップ)の歴史をたどっていきみたい。昭和46年に始まった選抜大会だが、地区予選や県予選を1月に1、2年生のみで行っていたため、「新人大会」を兼ねた大会として始まった。初の県予選優勝チームは男子が浜松商業、女子が浜松市立。しかし当時は男女とも全国選抜に出場できるのは東海選抜に優勝したチームのみ。女子の浜松市立は見事東海選抜でも優勝して、県内初の全国選抜優勝大会の

HISTORY OF WINTER CUP

コートを踏んだチームとなった。一方の男子の浜松商業は東海選抜で敗れ、全国大会出場はならなかった。だが、その浜松商業は昭和49年の第4回大会で、ついに男子チームとして初の全国大会出場を果たす。このように坂田勝利が率いる浜松商業は、選抜太会開始直後の静岡県バスケットボールを引っ張る存在だった。昭和54年に坂田が浜松北に転動するまでに、浜松商業男子は、県選抜制覇5回、全国選抜出場3回を誇った。

その後の男子バスケット界も浜松西、興誠(現浜松学院)などの西部地区の高校がけん引し、特に昭和62年にはこの両校が東海選抜で上位に食い込み、静岡県初の男子2校全国選抜出場となった。なかでも興誠はOBの石川友康が指揮官としてチームを一から作りあげ、昭和56年の第11回県予選から3連覇、59年こそ賜杯を静岡に譲ったが、60年から県予選4連覇。この7回の優勝時はすべて全国選抜出場を果たしている。同校は後藤正規のように後年日本代表にまでなった選手も輩出した。まさに昭和末期を疾風のように駆け上がったチームであった。ただこの全盛期の興誠をしても全国大会で勝ち抜くのは至難の業で、今までに5回準々決勝まで進出しているが、すべて厚い壁に跳ね返され、ベスト8止まりとなっている。

同時期に女子をけん引してきたのが浜松市立。榎本行宏が大学卒業直後から33年間一貫して指導し続け、最後の3月開催となった昭和63年までに県選抜優勝7回、全国選抜出場7回。特に昭和52年には県2位ながら東海選抜で3位に食い込み全国選抜

出場、59年には全国ベスト8に導いた。同じく高校女子バスケット界を盛り上げた静岡精華(現静岡大成)も県選抜優勝、全国選抜出場ともに3回を数えたが全国大会で勝利を挙げることはできなかった。浜松市立同様公立の女子校だった清水西は県選抜を2度制覇したが、ついに全国選抜の舞台を踏むことなく現在に至っている。

男子の興誠のように昭和後期から平成初期の女子バスケット界を突如席巻したのが市立沼津だった。昭和56年にいきなり県選抜優勝を果たすと翌昭和57年には県優勝。全国選抜でも堂々のベスト8に入った。青木良浩がカリスマ的な指導力で選手の心をつかみ、平成9年に静岡商業へ転動するまでに実に9回の県選抜制覇、全国選抜出場を果たしている。特に昭和63年3月の神戸開催では全国4位、12月の東京開催では3位と静岡県勢として初めてベスト8の壁を突破した。そして秋本恵、原久美子ら総勢5名の選手を大会ベスト5入りさせている。

平成に入り、大会名も「選抜優勝大会」から「ウインターカップ」の通称で呼ばれるようになり、静岡の高校バスケットも新興勢力が台頭してきた。男子は沼津学園、女子は常葉学園。西部地区に押されていた中部、東部地区が頭角を現してきた。沼津学園は平成元年に初の県選抜制覇のあと、平成5年には初のウインターカップ出場を果たした。指導者の杉村敏英が平成21年沼津中央に転出するまでに、県選抜制覇7回、ウインターカップ出場6回、最高順位は平成8年の全国ベスト8。

常葉学園は昭和62年に小前宏史が着

任。4年目の平成2年に初の県選抜優勝を果たすと以後5連覇を含む県選抜優勝14回、ウインターカップ出場も14回と圧倒的な強さを誇る。これは男女を通じてともに最高回数である。この常葉学園に特筆されるのは平成14年(この年女子は正月開催となったので厳密には平成15年1月)の県勢初のウインターカップ優勝校であることだ。櫻田佳恵、山田未来、三浦歩惟らの活躍で決勝戦で中村学園女子(福岡)を65対54で破った試合は静岡県の高校バスケット史上最高の名勝負として今でも多くのバスケットファンの脳裏に焼き付いている。平成の女子バスケット界は全国選抜出場11回を誇る市立沼津、その市立沼津を離れた青木が指導し2連覇を成し遂げた静岡商業、後述する平成10年優勝の静岡女子、平成15年に悲願の初優勝を果たした沼津中央、そして常葉学園の5校が、賜杯を分け合っている。

平成18年、興誠・飛龍・浜松商業の男子3チームの戦国時代に突如参入したのが、藤枝明誠。監督は昭和後期に昭和学院(千葉)女子で全国制覇7回の偉業を持つ西塚建雄。県外出身選手や中国人留学生を招くなど巧みなスカウティングで就任2年目の平成18年には早くも全国総体出場を果たす。県選抜ではその平成18年に準優勝、平成19年には優勝しウインターカップ初出場を果たす。その年から3年連続出場し、平成21年にはベスト8。特にこの大会で藤井祐真が記録した1試合79得点は現在も44年のウインターカップの歴史の中に燦然と輝く男子1試合最多得点記録である。平成25年には札幌創成(北海道)で女子チームを全国総体に5



常葉学園対市立沼津の間で行われた2012年の決勝戦。多くの観客が見守る中、常葉学園が連覇を果たす



沼津中央が3連覇を果たした2012年男子決勝(藤枝明誠対沼津中央)の様子。この試合は珠玉の名勝負として語り継がれている

回導いた三上淳が着任。その年の総体全国大会(大分)で見事準優勝、ウインターカップの出場も決め静岡県男子に出場枠をもう1枠呼び寄せた。11月の県選抜は決勝戦のみ出場。「試合勘」という点で心配されたが、「県代表」沼津中央にも勝利し、改めてその実力を証明した。ウインターカップでも堂々4位。平成24年に史上最年少で男子日本代表に選出された角野亮伍を核としたバスケットは静岡県のバスケットのレベルの高さを証明した。

現在その藤枝明誠と双璧をなすのが沼津中央。飛龍を率いた杉村が同校に着任。静岡県初のセネガル人留学生、シエリフ・ソウを中心とした高さのバスケットで平成22年藤枝明誠の4連覇を阻止し県内初栄冠。初のウインターカップ出場を果たす。その後平成24年まで3年連続出場。2度目の出場となった平成23年のウインターカップでは静岡県男子初のベスト4進出。これまで浜松西、興誠、沼津学園、藤枝明誠など8回県勢男子が跳ね返されてきた準々決勝の壁を見事突破。惜しくも尽誠学園(香川)との準決勝には敗れたが、3位決定戦で福岡大大濠(福岡)に快勝、見事3位入賞を果たし、エース、シエリフ・ソウも42回大会にして県勢男子初の大会ベスト5入り。この沼津中央の3位が現在まで県勢男子全国選抜大会の最高順位である。

近年は新興勢力として後藤正規率いる浜松開誠館や常葉学園菊川、静岡学園、星陵などが藤枝明誠、沼津中央、飛龍、浜松学院など強豪校の一角に加わりつつある。なお静岡

岡県予選形式が平成10年から決勝リーグの廃止、完全トーナメント制になったこと、平成13年度から東・中・西部地区予選を廃止、県予選のみになったことを付記しておきたい。

最後に県選抜の名勝負を紹介する。異論があるかもしれないが、記録や記憶の関係で比較的近年のものとしたい。

女子は平成10年決勝の静岡女子対市立沼津を挙げたい。残り4秒で静岡女子の劇的な3Pシュートが決まり逆転初優勝を果たした試合は「結末のドラマ」という点で今でも多くの人々の記憶に残る。

男子は、第4クォーター残り15秒、沼津学園2点リードで興誠の攻撃で1年生センターが3Pシュートを決め土壇場で逆転に成功し興誠が2年ぶりの優勝を手にした平成13年決勝の興誠対沼津学園。興誠が王者藤枝明誠相手に怒涛の追い上げを見せた平成20年決勝の藤枝明誠対興誠も捨てがたい。だがやはり最後の最後までどちらが勝つか全くわからなかったというスリリングな展開の試合として平成24年決勝の藤枝明誠対沼津中央を推したい。藤枝明誠リード、残り20秒で沼津中央主将の望月孝祐が逆転の3Pシュート。藤枝明誠もわずかな残り時間を使ってドライブからゴール下に絶妙なパスを合わせたが、直後のシュートがリングに嫌われ万事休す。100対97の激闘で沼津中央が3連覇を達成した試合は、平成18年から選抜県予選のメイン会場となり、ウインターカップ県予選の聖地となっている静岡県武道館(藤枝市)の会場が一番揺れた珠玉の名勝負であった。